

「生」のはかなさ感じて

和紙から伝わる水の音



和紙のインスタレーション作品「地下水」。白壁にはあめつちの歌が書かれた。池田町の極小美術館で

池田・極小美術館 愛知の米山さん個展

和紙や米粒を素材に使う愛知県長久手市の造形作家、米山よりのさんの個展が池田町の極小美術館で開催されている。「地下水—Grand water」と題した渦巻き状の和紙の巨大なインスタレーションが、土地や素材の記憶を呼びさます。

直径3・6メートルに広がった和紙が展示空間に波打つ。材料は、奈良の吉野和紙と大垣の地下水。米山さんが和紙を一枚一枚蛇腹に折り曲げ、つな

いだり重ねたりして1週間かけて制作した。和紙は水に漬けるとほどけ、再び乾燥させることで独特な風合い（マチエール）を生み出すという。

極小美術館の建つ山あいの池田町は大垣市にかけて地下水が豊富な場所だ。米山さんは「地下水に静かなイメージをもっていたが、豊かな水は水害も起す。恩恵と災いは

同じ源泉から来ている」と制作動機を振り返る。

2日の開会式に鑑賞した名古屋市の美術評論家、馬場駿吉さんは「作品から音が聞こえてくる。水の荒々しさが生々しく伝わってきた」と話した。

埼玉県出身の米山さんは東京芸術大・大学院で学んだ。中学時代に自死する女性を目標とした体験から生と死の境界を見つめ続ける。当初は金工の作品を手がけていたが、2003年に名古屋市内のギャラリーで吉野和紙のすき師とコラボ展をしたのを機に和紙に魅了され、国内外で作品を発表している。

米山さんは「和紙はきれいな水とたくさんの手間をかけて制作される。水をつけてほどこと工程が見えてくる。生きとし生けるものはかなさを和紙にこめて表現したい」と話す。

9月27日まで。米山さんは土曜を中心に在館予定。鑑賞は極小美術館（090・58533・3766）に事前予約が必要。【山田泰生】